漱石散策

漱石が描いた世界

漱石が、自我、自己本位、自覚心、selfconsciosness、個人主義、時には「己れ」という言葉で言い表すこともあった自意識は、人間が文明の中で獲得した英知ではありますが、諸刃の剣もあって、同時に、人間に大きな不幸ももたらした。これを手にすることによって、人は人類史上もっとも生き辛らい「生」を生きなければならなくなった。

漱石作品の主人公たちはみなその犠牲者ともいえる。

初期の「坊っちゃん」や「三四郎」などは割合軽症なのですが、後の作品になるほど重症になっていく。

”美”意識過剰の「それから」の代助。

世俗的な葛藤から逃れるために信仰を求める「門」の宗助。

何かにつけ思念が内へ内へと”とぐろ”をまく「彼岸過迄」の須永。

他者不振の権化ともいうべき「行人」の一郎。

煩瑣な人間関係の中で磨滅していく「道草」の健三。

そして、エゴ故に親友を死に追いやってしまう「心」の先生。

どう見ても楽しそうでない人生を送る彼らのその苦悩の源は、みな自意識である。

Selfconsciousness、の結果は神経衰弱を生ず。神経衰弱は２０世紀の共有病なり。人智、学問、百般の事物の進歩すると同時に、この進歩を来したる人間は、一歩一歩と頽廃し、衰退す。　「断片」メモ

悩みの「現象学」

漱石の後期三部作といわれる「彼岸過迄」、「行人」、「心」の作品の中で、

「彼岸過迄」では、探偵にあこがれている敬太郎という若者が狂言回し的に主要人物の物語を引き出していき、彼自身は、平凡な、何のとりえもない「太郎冠者」で、結果的には、「聞き役」としての役割を果たしている。

「行人」では、一郎の弟の二郎が、極端な人間不信である兄の深層心理に踏み込んでいく役目をし、もっとも、後半ではＨさんという友人が主治医的に観察し、家族に報告している。

「心」では、先生が「私」への手紙という形をとって「謎の種明かし」をする。自らの心理の軌跡を告白。

つまり、第三者が三人称で、ただ客観的に対象を描写するのでなく、また作者は、ある意図のもとに登場人物を操るのではなく、その人物が、なぜそのような行動をとり、なぜそのような発言をしたのか、ということを、精神分析的に

描写している。
　漱石はこの文学の手法について、「写生」という言い方をしているが、人間心理を現象学的にとらえている手法である。

漱石が描く五つの「悩みのタネ」

「幸福の弁神論」、「苦難の弁神論」から、夢も希望もなく、模範となるべき者は一人もいない。「幸福の合格基準」「幸福の方程式」とも深く関係している。

①　「お金」

漱石ほどお金にまつわる煩いを描いた作家はいない。

縁を切ったはずの養父たちに付きまとわれ、かつての恩をネタに金をせびりとられる「道草」。これは自伝的小説ですから、漱石自身に、そのような経験があったのかもしれない。

それから、「心」。先生が深い人間不信に陥ったのは、田舎の親戚に両親の遺産をだまし取られたこと。「私」が先生に、自分の縁者はみな田舎者だから悪人というほどの人間ではない、と言った時、キッとなって「田舎者は何故わるくないんですか」、「田舎者は都会のものより、却って悪い位なものです」と切り返したその態度には、ただならぬトラウマのようなものを感じる。

金銭の貸し借りには、「三四郎」や「行人」など、漱石にとっては、日常生に近いほど日常茶判事であったからか。

②　「愛」

これもまたお金に結びついた、いわく言い難い苦悩のタネに「それから」がそうで、代助と三千代の恋愛は、経済力さえあれば、はるかに単純なもので、三千代が人妻だとか、不倫だとかいうよりも、お金の問題がからんだために、物語は複雑になってしまっている。「金がなければ愛も成り立たない」。
「明暗」もある意味、金と愛の話。

お延は、おのれの存在感をアピールしたい一心で、父親から金を引き出せない夫に代わって自分でお金を調達してきたりするのですが、「良人に絶対必要なものは、あたしがちゃんと拵える丈なのよ」などと言い放つあたりは、金で愛（歓心）を買っているとしか言えない。

③　「家族」

夫婦と子供からなる家族が最も基本的な共同体だとすれば、漱石の描く夫婦はそうなる前の段階であり、それゆえ「行人」の一郎とお直や、「心」の先生と奥さんや、「明暗」の津田とお延のように、緊張しきったとのような不信劇が二

人の間に展開される。家庭はある時代まで、厳しい外界から身を守る避難所のようなものであり、共同体の中で、ささやかながら最も濃密で温かな団欒の場であったはずが、いつしかそうではなくなり、「かすがい」をもたない二つの個体が神経的バトルを繰り広げる、畳のリングになってしまった。

④ 「自我の突出」

夫婦の修羅場とも関係して、自分らしくありたい、自分をアピールしたいと、きわめて強い自己顕示欲を抱いているにもかかわらず、実は自分が何ものなのかがよくわからない。そのため、「自分は自分」として超然としていることができず、他者のまなざしが異常に気になり、その結果、神経過敏症に陥ってしまう。

⑤ 「世界への絶望」

この世界に対する絶望感。実存的空虚感。自分の人生に意味を見いだせず、世界からその精神的な輪郭が失われて、自分が無へと滑り落ちていくような恐怖に苛なまれる。

漱石の描いた人物の中で、その最たるキャラクターを上げるとすれば、「行人」の一郎です。彼はまさに自分と自分以外のものとの関係がわからないのです。

彼は、時には自然や森や谷を自分の所有物のように感じたり、時には自分自身が神だと言い出したり、自我が突出して、世界の中で自分の位置を見失うと、このような感じになる。にもかかわらず、本人は大学教授としての社会生活は一応、営めていて、そのように外聞を嫌う事が出来ているだけに、なおのこと苦しいわけである。

時代にまかれた悩みのタネ

一つは、文明化（合理化）とその延長線上に発展した経済システム。このとき人と人を結びつける人為的な契約のモデルになったのが、市場経済における交換関係。人と人が相互の便益のために貢献しあい、モノやサービスを公正に交換に会うような関係ではなくなり、持てる者と持たざる者の差がとてつもなく開いた、ゼロ・サム・ゲームになってしまった。そして、不信が利益を生み、利益が不信を助長するスパイラルが、金融中心のグローバルな資本主義の中で形成されていくことになった。

二つ目は、近代の到来とともに人間同士のつながりが切れ、バラバラの存在になった。これは「原子化」や「群衆の誕生」といえる事態である。この現象が加速し、人間の孤立化が進み、むき出しの自我が一足飛びに育ていくことに。

こうした現象は、現代のネット社会において、急速に増殖し、ネット社会で

は、形状としては、すべての個人が水平的に平等で、どこに中心があるわけでもなく、みながどこにも固定されない形で横につながっている状態。そしてみなが直接目標にアクセスできる形です。個人志向型でありながら、実は極めて他人志向である。浮動的な価値観、バーチャルな世界へエスカレート、ストレスの蔓延。

三つ目は、「公共領域」が大きな歪みを来たす。公共領域の有名無実化、消滅化である。匿名の不特定多数の個人の自由意思が民主的な相違を決定する。市場が政治を動かす社会である。しかし、今や、市場こそ何よりも合理的であるなどという理屈は成り立たなくなりつつある。柔らかい全体主義が社会を覆いつつある。悩みはさらに深くなっていく。

「ホンモノ」探し、「自分らしさ」の探求へ。

九州から大都会に出てきて、右往左往する「三四郎」の主人公、三四郎。彼のキーワードは「迷える子」（ストレイ・シープ）で、漱石の中では穏健で善良なタイプ。彼は自分の目の前にいくつかの世界を並べてみて、あれでもない、これでもない、そちらはどうか、どれが一番よかろうか、一生懸命考えてみたりします。あるいは、何か無性に満ち足りないので、友人の与次郎のすすめに従って市電であちこち行ってみたり、寄席に行ったりするが、答えはなかなか見つからない。

次が「それから」の代助です。彼のキーワードは「虚無」（ニル・アドミラリ）で三四郎よりは毒がある。都会の高等遊民として世の中をニヒルに見切っている。不敵に構えているというよりは神経質なたちで、周囲の人間とは違う自分だけの世界を懸命に模索している。また、彼は舶来の香水を購入したり、鏡に映る自分の姿にうっとりしたり、花を買って自分の部屋のなかに生けてみたり、ずいぶん洒落たことをする。いわゆる「顕示的な消費」でハイソサイエティで洗練された自分を演出している。

そして、究極の自分探しの人、「行人」の一郎です。キーワードは、「自我の牢獄」となづけられる。彼の場合はあまりに自己実現願望が強すぎて、結局どうなりたいのかわからなく、超弩急の人間不信と、超弩急に他者を求める気持ちが拮抗している。

もうひとり、「彼岸過迄」の敬太郎がいる。彼は新聞に載った洞窟での大ダコ狩りの冒険譚を本気で面白がるような罪のない青年で、大学を出たものの職が無く、一生懸命にその口を探しているが、その彼がどんな仕事をしたいかというと、探偵のようなことがしたいという。彼にとって、それが最も自分を魅了する、ワクワクする、自分らしい仕事なのである。実際、かれは仕組まれた茶番劇のなかで、それも大いにロマンチックな気分で探偵の仕事をやってみるの

ですが、結局、世界の暗黙の核心のようなところには何ら踏み込めずに終わってしまっている。
　漱石にとって、「探偵」というのは、近代人の性質のなかで最も忌むべき心性でした。自意識が過剰になると他人の思惑が気になり、コセコセと盗視するように他人の腹を窺うようになる。それを「探偵的だ」と言って漱石は唾棄した。ですから、「探偵」がやってみたいと無邪気に言い放つこの青年を、漱石はなかば人の悪いパロディとして描いた。

現代のホンモノ探し
　いまの私たちは、敬太郎のように冒険として、あるいは一郎のように人間不信の結果として、ホンモノ探してしているのではありません。かつての大学生たちのように、ロマンチックな革命を起こそうとしているのでもありません。そうではなく、100 万人ものうつ病患者と、年間 3 万人の自殺者がいて、10 人に 1 人は仕事がない状況で、しかも、やがて訪れる基礎年金のみによる生活におののきつつ、自分はどう生きていくかという、切羽詰まった自分探しを余儀なくされているのです。先の見えない暗いトンネルの中を手さぐりでさまよい続けるか、それとも、何とか自分はうまく抜け出して、未来を展望できる処に浮上できるか、ぎりぎりの闘いを強いられている。現在の自分探しは、こんな風に、いよいよ末期的な現象が頻発する社会のシステムと、いろいろな局面で密接に関係します。これは、探偵ごっことも、自己実現ごっことも、革命ごっことも違う、とても苦しいホンモノ探しなのです。

なぜそうなったのか。
　究極まで発達したグローバル資本主義の中では、ホンモノ、、、自分らしさという唯一無二のもの、、、は殺がれる方向に向かわざるを得ません。人間はどこでも誰でも代替可能、入れ替え可能な、等質な「商品」であることが求められ、それに必死に抗おうとして、自分だけの個性やオリジナリティを求める気持ちが出てこざるを得ません。それが、切実なホンモノ探しの背景になっている。
　そして、「ホンモノを探せ」という言説が巷に満ち溢れていること。それに乗せられて「ホンモノになりたい」「自分らしくありたい」と必死になることにも息苦しさを感じざるを得ない。

己を知るべし
　天下に何が薬になるというて己を忘するるより鷹揚なる事なし無我の境より歓喜なし。カノ芸術の作品の尚きは一瞬の間なり、とも恍惚として己を遺失して、自他の区別を忘れしむるが故なり。「断片」漱石創作メモ

ホンモノ探しの元祖、漱石はホンモノの自分を探せ」とは言わず、反対に、「自分を忘れろ」という。

此弊を救うにはたとい千の耶蘇あり、万の孔子あり。億兆の釈迦ありとも如何ともする能わず。只全世界を二十四時の間海底に沈めて在来の自覚心を滅却したる後日光に曝して乾かすより外に良法なし。